

北水研ニュース

No. 25

昭和56年8月
水産庁
北海道区水産研究所
釧路市桂窓116番地
電話 (0154)91-9136
郵便番号 085

さけの脳波と磁気コンパス

(上田教授の講演より)

7月30日午後3時半から上田一夫教授(東大・理・動)の講演会が開催された。先生はさけ別枠研究の2つの大課題(海中飼育放流技術・魚食性さけ属資源)の研究グループに参加されているが、以前からさけますの感覚と行動について精緻な研究手法で取組まれてきた。今回は次の3つの話題について最も新しい知見を発表していただいた。

始めのさけ回帰親魚の嗅感覚と脳電図については、この分野での世界でも最先端かつ独自のさけ脳波の構成周波数をパワースペクトル解析法によって、母川水としての特徴は熱に安定で水溶性、非揮発性で透析可能な成分を含んでいることを明らかにした。そしてこの結果はべにざけ等について北米側で行なわれた行動学的研究結果と全く対照的であるが、彼らの実験法には致命的な欠陥があることを示唆されるとともに、生物体の反応量の測定にはいかに生体の取扱いと条件の設定が重要であるかを指摘された。

次の話題はさけ稚魚の水温選択の問題である。体長6cmのさけ稚魚を温度勾配をもつ水槽に入れた場合、実験前の飼育水温に関係なく13℃を好むことがわかった。成長段階に応じて水温選択がどう変わっていくか、塩分濃度との関係はどうか、より広い水温幅を与えた場合にどうなるか、は今後の問題として期待される。

最後に今年度行なわれたさけの磁気定位の実験について興味ある話があった。もともと生物の磁気走性の例はバクテリアをはじめ、蜜蜂、伝書鳩等について報告されているが、さけについては1980年にワシントン大学のQUINNによる体長2.7cmのべにざけ稚魚の例

しかない。この例として実験技法や結果についてはクリアなものとはいえないのである。上田先生によるしろざけ稚魚の実験は、極めて明瞭にしかも磁場を変えた途端に定位の変化がみられたのである。しかし残念ながら、さけ稚魚の頭部からはマグネタイト様物質の検出は現在までのところ成功していない。この実験結果の意味する重要性は、さけの長距離大回遊に際しての定位機構に関してであろう。短距離回遊、例えばよく知られているように親魚が日本に接岸してからの回遊には嗅覚が定位の主な役割りを演じていることは確かである。しかし北洋から日本へ向っての長距離回遊のデシジョンメーカーが何であるかは、多くの説があるものの実験的に裏打ちされた知見は極めて少ないのである。これは大きな謎といってもいいものである。

最近になって、日本からワシントン州へ移植されたしろざけがビューゼットサウンド内にローカライズされて外洋へ出なかったことや、日本から南半球のチリへ移植されたしろざけがまだ親魚として帰ってこないという情報があるが、これらはさけの磁気定位の存在からみるとすこぶる興味ある問題である。今後さけ成魚についても磁気感覚とマグネタイト様物質の検索が必要であるとともに、ふ化稚魚を含めた広い成長段階について磁気定位の役割りを明らかにすることが必要であろう。この定位の機構の解明によって、人為的にさけの回遊を統御する可能性がでてくるかもしれない。要は、壮大な精緻な実験研究を組立てることである。

(増殖部長白旗総一郎)

目次

さけの脳波と磁気コンパス	1 頁
異常低温現象	2 頁
宇宙海洋学	2 頁
釧路沖で獲れた巨大なミズダコ	2 頁
赴任にあたって	3 頁
刊行物ニュース	4 頁

次

所内セミナー	4 頁
昭和56年度内外研究員派遣	5 頁
昭和56年度北水研船舶運航調査予定表	5 頁
会議情報	6 頁
北水研日誌	7 頁
人事異動	8 頁

異常低温現象

北野清光

気象庁発行の全国海況旬報をみると、1月以降・三陸常磐沖の月平均海面水温偏差が -3°C から -4°C の異常低温をひきつづき示している。このような異常低温は1976年以降全くみられない。1974年と1975年に -3°C 位の水温偏差がみられたが、5月11日と3月にそれぞれ断片的にあらわれたにすぎない。ところが、本年は1月以降ひきつづき -3°C 以下を示し、6月現在まだ回復のきざしがみえない。まことに異常低温年といわなければならない。

1981年にこのような異常低温現象がおこりうるのは、1977年発行の北水研・研究報告42号、62頁に明記しておいた。詳細は同報告を参照していただきたい。このような西域での異常低温現象は北太平洋全域の海況変動機構の一環として、くりかえし派生している事で、これまでの情報を年代順に整理するとよく判る。したがって、局部的な現象にだけとらわれていると広域且本質的なことがなかなか判らない。

1981年の異常海況年の予測は整理された情報と4、5年周期の外挿から得られたものであるが、結果的には1980年の本州南冷水塊の消失および1981年の異常低温となつてあらわれた。この年は太陽の黒点が極大に近づく年である。太陽の黒点と異常海況年との関連についてはいずれ稿をあらためて報告したい。

これ以外にも記憶に生々しい低温現象が1963年に起こっている。この年は太陽黒点の極小年の近傍にあたる。又、1957年と1958年に異常海況現象が発生している。この年は、今世紀最大規模といわれる太陽黒点群の出現した年であり、過去200年位の長い年月を溯つてみても、このような最大規模の黒点群に遭遇することはない。

北太平洋を東西に横ぎる極前線の南・北偏と東・西域でのシーソー現象、黒潮流軸の4.5年周期等多くの断片的な情報を探りあてて、パズルを組立てるように整合性のある全体像を構築することが必要であろう。それにしても、missing link が時間的・空間的にみてもあまりにも多い。近い将来、Space SurveyやLDCS等の一層の充実が望まれるゆえんでもある。

(海洋部第一研究室長)

宇宙海洋学

北野清光

最近、Space Oceanography、宇宙海洋学という用語が使われるようになった。これは従来の線と点によるSurveyがSpace Surveyにおきかえられる転換期を意味するのではないと思われる。

昨年5月にひらかれたCospar/Scor/IUCRM共催によるシンポジウムOceanography from Spaceはこの意味でrevolutionalなもので事実そのような雰囲気はそのまま9月のWoods Hole海洋研究所での「海洋学の将来に関する討論会」にもちこまれた。その際Whitehead博士によりGulf Streamからpinch offされるringの様子がSatellite movieにより克明に写しだされた。目下、Space Oceanographyの教科書がScripps海洋研究所のStewart博士により準備され近々刊行の予定ときている。

昨年2月に、NOAA-NMFS-NFCよりNew England Area Remote Sensing Notes, NEARS 1号が発行され、現在迄7号をかぞえており、NFC内に、New England Region リモートセンシングセンターを設立し、直接人工衛星の画像を受信、処理、保存、解析できる施設をもうけ各機関、大学関係者との共用をめざして活発な活動をつづけている。米国の首都ワシントン市近郊グリーンベルトにあるNASAには人工衛星に関する情報がすべてあつめられている。NASAは一般に内部に入ることがむずかしく、ふらりと立よると大使館を通じ許可を得るのに1週間位はかかる。

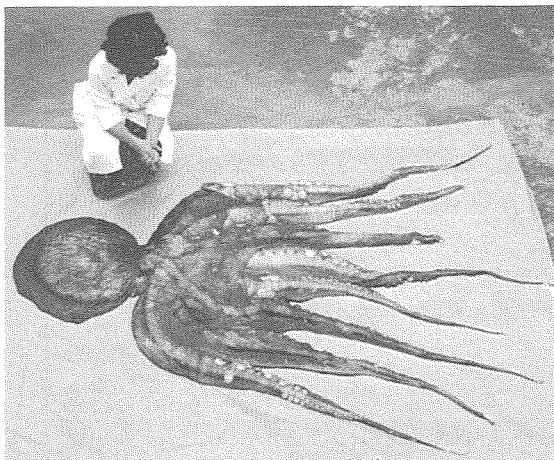
Scripps海洋研究所では海洋リモートセンシング施設がつくられ、受信・処理・解析・保存と一貫した作業を行っている。となりの水産研究所ではこの施設により水産への応用について各種の研究をすすめている。

(海洋部・第一研究室長)

釧路沖で獲れた 巨大なミズダコ

Poroctopus dofleini dofleini
(WÜLKER)

昭和56年7月14日朝、北水研庁舎付近の前浜で、きわめてジャンボなミズダコが漁獲された(写真)。これは釧路市桂恋港沖出し1700mのサケ定置網(身網部



の水深22m)に乗網し魚市場に出荷されたもので、大きすぎて容易に買い手も付かず、このため値段も格安であったところから測定する機会を得たものである。

ミズダコは、北海道全域に分布している普通のタコ類で、通常は本種のメスがマガコ、オスがミズダコまたはシオダコと呼ばれており、タコ類としては最大になる種である。北海道のタコ漁業の支柱をなし、年間1.5~2万トンの漁獲がある。専用漁業としてはタコ函(木箱)、空釣縄、いさりびき(樽流しまたは舟曳きの2漁法がある)などがあり、就中、漁獲高の多い宗谷湾や渡島方面の樽流し漁業は、この地方の風物詩でもある。漁獲物は4~7kg位の個体が多く、20kg以上のもも珍しくない。しかし、今回のような超大型は漁業者間でもそう経験していないと思われる。われわれが行った過去の調査資料の中では最大である。

このタコの測定値は次のとおりである。

性 別	雄
全 長	250 cm
套 背 長	50 cm
体 重	41 kg
生殖巣重量	1,721 gr (陰茎枝を含む)
肝 臓 重 量	637 gr
舌 状 片 長	34 cm
腕 長 式	1=2,3,4
精莖8本、うち2本は未完成(精虫塊なし)	

(資源部・金丸信一主任研究官)

赴任にあたって

中 野 広

世の中には、多くのめぐりあわせがあるものです。昨年の秋、ある会議の後、水産庁に帰るバスの中で、「北海道に帰ることもないでしょう」と同乗の三本管さん(北水研海藻研究室長)に話をした矢先、なぜかしら北海道の土をふむことになり、氏と同じ部で仕事することになりました。

昨年末、研究課長から「北水研に行かないか」と打診があった時は本当に驚きもし、また釧路に来る意志は正直いって余りありませんでした。なぜならば、第一には私の専門が利用加工であること。第二には、釧路の生活のきびしさを少なからず知っていたためでした。

では何故、今釧路にいるかと申し上げますと、まず増殖部長をはじめとして多くの方々から強いおさそいがあったこと、さらに私自身、産業研究所で研究生活を送るには、少なくとも水産業の現場に折りにふれ、ハダで感じた方が良いだろうと思い、釧路というのはこの意味で良いところだと思ったからであります。私の場合、学部と修士は水産学部は出たものの、その後は畜産や獣医にいたため、水産の現状については全く無知ともいえるからでもあります。(赴任後、部内でこれについては御配慮いただき、既に根室湾のホタテやホッキ貝の調査、サロマ湖でのサケ稚魚の調査、ふ化場の見学等、多くの機会をいただいています。)

また、専門分野のことについて一言付け加えるならば、獣医学科に在籍の間、少々細胞生化学的なことに手を染めていたため、増殖の分野でその経験は生かせるだろうし、また生かさなければならなかったからであります。

蛇足として、大学時代の悪友(?)や良き先輩(?)が、釧路にいたことも一因と思います。

既に、北水研に移って4ヶ月を過ぎようとしています。私の現状は、どのようなテーマに取り組んでゆこうかと文献をさぐっているところです。

一年間研究課に在籍中、お世話いただいた行政、研究所、都道府県、および民間の方々に、この紙面を借りてお礼申し上げますと共に、増殖部門については、およそ無知な私ですが、今後よろしく御指導お願い申し上げます。

(増殖部・魚介類研究室)

刊行物ニュース

北海道区水産研究所研究報告46号(印刷中)

村田守・石井正・大迫正尚：アカイカの觸腕の再生について(A321)

入江隆彦・小林時正・大迫正尚：海洋生活期初期のサケ・マス幼魚の生態に関する研究Ⅰ。網走湾海域における幼魚の分布と行動(A322)

入江隆彦：オホーツク海北部水域のニシンの研究Ⅱ。体節の形質の変異について(A323)

入江隆彦・梅崎勇：舞鶴湾の海藻の分布について(A324)

小林時正：ハタハタの脊椎骨数変異と発生初期の水温の関係について(英文, A325)

小林時正・加賀吉栄：北海道周辺海域のハタハタの産卵群の計数形質変異から推定される系統群構造について(A326)

和田時夫：南下回遊初期におけるサンマ大型魚群の生殖腺重量と肥満度(A327)

伊藤博・和久井卓哉・館内良則・立沢静夫：ヒメエゾボラの籠漁具に対する行動について(英文, A328)

伊藤博・立沢静夫：籠漁獲によるヒメエゾボラの利用可能資源密度の推定(英文, A329)

久保正：宗谷海峡南東岸における沿岸流と海況の季節変動について(A330)

短 報

北野清光：人工衛星ノア6号の赤外画像からみた黒潮と親潮の合流域の特徴(英文, A331)

北野清光：人工衛星ノア6号の赤外画像からみた黒潮の渦動について(英文, A332)

北野清光：太陽黒点の変動と遠州灘沖冷水塊の関連について(英文, A333)

1980年度農林水産技術会議別枠研究、溯河性さけ・ますの大量培養技術の開発に関する総合研究「河川型研究グループ」レポート。1981年3月。

阿部深雪・藤井浄：網走湾周辺の春季の沿岸水の動向について(C. 422)

佐藤芳和：春季サロマ湖の第二湖口における湖内水と外海水のプランクトン量について(C. 423)

久保正：サロマ湖および湖口周辺の海況変動について(C. 424)

駒木成：サロマ湖およびオホーツク海南西域での無機栄養塩変動様式に関する統計的分析(C. 425)

白旗総一郎・坂口洋尚：1980年サロマ湖放流シロザケ稚魚の追跡(C. 426)

白旗総一郎・鈴木誠：シロザケ稚魚の海水適応-4. 0.6g 稚魚の100%海水移行後の生残と成長(C. 427)

白旗総一郎：海洋生活初期のカラフトマスとシロザケ稚魚の識別(C. 428)

(以上 北水研関係分)

北海道区水産研究所：昭和56年度第1回太平洋イカ長期漁海況予報, 昭和56年7月(C. 431)

大迫正尚・土門隆・加賀吉栄・阿部深雪・藤井浄：北海道海域大陸棚斜面未利用資源精密調査報告。昭和54年度大陸棚斜面未利用資源精密調査報告書(第3年度版), 北水研, 昭和56年1月(C. 430)

和田時夫：北海道沖の南下サンマの生物学的特性。技術と経営(C. 429)

阿部深雪：1979年の北海道周辺海域の海況。漁場海況概報, 1981年3月, 北水研(C. 420)

藤井浄・阿部深雪：1979年の根室湾内の海洋構造の特徴。漁場海況概報, 1981年3月, 北水研(C. 421)

三本菅善昭：種苗蒔き付けによるコンブ群落の人工造成。北水研ニュース24号, 昭和56年2月(C. 432)

好井義明：これからのスケトウダラ資源調査。北水研ニュース24号, 昭和56年2月(C. 433)

所内セミナー

(増殖部若手グループ主催)

第1回 6月1日 タンパク質の安定化に及ぼす水の影響について(増殖部 中野広)

第2回 6月8日 ツブ漁業について(増殖部 伊藤博)

第3回 6月22日 サンマの北方水域における生活について(資源部 北片正章)

第4回 7月6日 リモートセンシングについて(海洋部 北野清光)

第5回 7月20日 ニシン稚魚の天然餌料の問題
—私の研究ノートより—(企画室 飯塚篤)

第6回 8月3日 ホタテ貝の貝毒について(増殖部 和久井卓哉)

56年度北水研船舶運航調査予定表

(俊鷹丸は遠洋水研所属※印用船)

月 船	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
北 光 丸			10 25日×2回 北洋さけ・ます調査 北西太平洋 (遼水研)	5 さんま調査 太平洋	27 (15)	10 さんま調査 太平洋	21 (20)	10 さけ・ます別枠 太平洋・オホーツク	16 (20)	5		14 (30) いか調査 太平洋	15
探 海 丸	10 2026 (11) (20) 海洋調査 日本海	かに調査 オホーツク海	2 22 (21) さけ別枠 太平洋	1 15 24 (15) (20) かに調査 オホーツク海	12 21 (20) いか調査 太平洋	9 海洋調査 根室湾	26 (25) 海洋調査 道 東						新船 試験航海
俊 鷹 丸			12 いか調査 太平洋	4 7 20 さけ別枠 オホーツク海									
※ 但 州 丸	14 すけとうだら新規 加入群調査 日本海・太平洋		10							20 すけとうだら新規 加入群調査 太 平 洋	18		
※ 若 潮 丸													
※ 北 鳳 丸										15 すけとうだら新規 加入群調査 日本海・太平洋	22		
※ 第31万漁丸					1 クイック・ストック・アセスメント調査 太 平 洋			30					

流動研究

昭和56年度

村田 守主任研究官

内外研究員派遣

アカイカの資源量並びに許容漁獲量の評価・予測
方法に関する研究。

東海区水産研究所・数理統計部

昭和56年11月1日～12月28日

長期在外研究

小林 時正技官

底魚類の系統群構造解析に有用な生化学的手法に
関する研究。アメリカ商務省海洋漁業部、北西アラスカ水産研
究所。

昭和56年9月8日～昭和57年9月7日

国際共同研究

北野 清光室長

東オーストラリア海流に関する共同研究。

シドニー大学海洋研究所。

昭和56年8月29日～11月6日

会議情報

昭和56年度第1回北海道ブロック漁業資源調査並びにスケトウダラ新規加入群資源調査打合せ会議

場所：北海道区水産研究所会議室

日時：昭和56年5月19・20日

〔出席者〕

水産庁研究部資源課・丹羽調査官

北海道水産部水産課・藤原主事

中央水産試験場・北浜部長、林科長

稚内水産試験場・坂本部長、佐野研究員

網走水産試験場・辻部長、佐々木研究員、

宇藤研究員

釧路水産試験場・小島部長、小池研究員

函館水産試験場・若生部長、坂本科長

田中室蘭分場長

北海道大学水産学部・前田辰昭助教授

北海道区水産研究所・新谷部長、北片室長、大迫

室長、好井技官、吉田技官

小林技官、入江技官、石井

技官、村田技官、和田技官

議事

1) 水産庁挨拶(丹羽調査官)

2) 56年度200カイリ水域内漁業資源調査、漁海況調査、沿岸重要資源・底魚資源委託費調査計画の検討とりまとめ

3) 55年度スケトウダラ新規加入群資源調査結果の報告

(1) 但州丸・探海丸調査結果の概況

(2) 根室海峡調査結果の概況

4) 56年度スケトウダラ新規加入群資源調査計画

5) 底魚類資源評価原案作成の打合せ

6) その他

昭和56年度第1回太平洋イカ長期漁海況予報会議

場所 水戸市

日時 昭和56年7月2・3日

〔出席者〕

水産庁研究部資源課・丹羽調査官

釧路水産試験場・中田 淳

函館水産試験場・渡辺安広

青森県水産試験場・斉藤場長、沢田兼造

岩手県水産試験場・小向場長、岩切部長、

井ノ口伸幸

宮城県水産試験場・伊藤部長

福島県水産試験場・小松昭衛

茨城県水産試験場・大方部長

千葉県水産試験場・芝田健二

静岡県水産試験場伊東分場・山本浩一

漁業情報サービスセンター・市川和平

海洋水産資源開発センター・渡辺 洋

東北区水産研究所八戸支所・久保田技官

北海道区水産研究所・大迫室長

議題

1) スルメイカ・アカイカの漁海況の経過と現況報告

2) スルメイカ・アカイカの資源状態

3) スルメイカ・アカイカの来遊資源量予測

4) スルメイカの東北・北海道太平洋漁場の7～9月期の漁況予測

第4回北海道区ブロック会議

日時：昭和56年7月21日 10:00時～17:00時

場所：釧路東急イン会議室

開会(企連室長)

北水研所長あいさつ

出席新メンバー紹介

座長選出

議題

(1)昭和56年度の調査研究の概要と

推進上の諸問題

①北水研からの報告(座長：小杉場長)

②道試験機関からの報告(座長：上村所長)

(2)総合意見交換(座長：結城場長)

(3)その他

〔出席者〕

中央水産試験場小杉場長、同滝沢副場長

釧路水産試験場結城場長

函館水産試験場川嶋場長

稚内水産試験場田元場長

網走水産試験場内藤場長

栽培漁業総合センター鈴木場長

道立水産孵化場吉住調査研究部長

北海道区水産研究所上村所長、飯塚企連室

長、新谷資源部長、駒木海洋部長、白旗増

殖部長、阿部庶務係長

北 水 研 日 誌

2. 2 水産庁漁港部黒木俊一漁港計画官外10名来所。
2. 4 留萌市役所水産課職員等4名来所。
2. 13 道立中央水試総務部吉田正敏主事来所。
2. 15 探海丸第9次航海（スケトウダラ新規加入量資源及び卵稚魚調査）出港、土門主任研究官乗船、27日まで。
2. 18 東海区水研数理統計部嶋津靖彦技官来所。
2. 27 北海道警察学校釧路方面分校生徒17名来所。
3. 4 指定漁業漁獲統計協議会開催、於北水研会議室。水産庁北海道漁調佐藤所長、札幌統計情報事務所大浜水産統計課長補佐来所。
3. 4 留萌市漁協秋田副組合長外3名来所。
3. 9 北光丸第9次航海（スルメイカ、アカイカ産卵調査）出港、村田主任研究官乗船、20日まで。
3. 9 探海丸第10次航海（日本海、卵、稚子、カニ調査）出港、土門主任研究官乗船、20日まで。
3. 10 企画連絡室長会議（技術会議）出席のため飯塚企連室長東京都へ出張、13日まで。
3. 24 第79回共済支部運営委員会ほか出席のため谷口事務官札幌へ出張、27日まで。
3. 25 昭和55年度200カイリ水域内漁業資源調査及び漁海況調査北海道ブロック連絡会議開催、於北水研会議室、26日まで。水産庁資源課塩田班長、道庁内田係長、各水試担当官出席。
3. 27 水産庁振興部開発課河田課長補佐、鈴木課長補佐、日本栽培漁業協会神崎総務部長来所。
3. 27 ドイツ連邦漁業研究所W・シュライバー博士東海区水研岡田部長来所。
3. 30 海洋水産資源開発センター江原専務理事、水産庁研究部資源課尾川係長来所。
3. 30 東海区水研会計課日下部事務官外1名金庫検査のため来所。31日まで。
3. 31 釧路市立桜ヶ丘中学校石戸谷校長外1名来所。
4. 5 庶務課長会議出席のため村本庶務課長東京都へ出張、8日まで。
4. 6 釧路海上保安部鈴木部長来所。
4. 6 釧路市水産部浅野水産課長外4名来所。
4. 7 所長会議及び所長懇談会出席のため上村所長東京都へ出張、11日まで。
4. 8 所長会議及び企画連絡室長懇談会出席のため飯塚企画連絡室長東京都へ出張、11日まで。
4. 8 探海丸昭和56年度第1次航海（サケ属幼魚の北上期の北海道西岸の海洋調査及び津軽暖流の春季の南下状態把握調査）出港、藤井主任研究官乗船、28日まで。
4. 9 アラスカ州デリリングム高校シュライバー先生外生徒6名来所。
4. 22 北光丸昭和56年度第1次航海（第2種中間検査及び機関部分割検査並びに一般工事、於塩釜市東北造船KK）出港、5月23日まで。
4. 22 釧路商工会議所木村常務理事外1名来所。
4. 23 遠洋水研北洋資源部高木室長、海洋資源開発センター中村悟氏来所。
5. 1 函館海洋気象台古橋主任技術専門官外2名来所。
5. 6 探海丸第2次航海（オホーツク海カニ資源調査）出港、土門主任研究官乗船、20日まで。
5. 11 ワシントン大学デビット・フルハーター博士、東大海洋研研究生デビット・ウィルク氏来所。
5. 18 釧路市議会事務局安宅事務局長外6名来所。
5. 19 昭和56年度第1回北海道ブロック漁業資源調査及び漁海況調査連絡会議開催、於北水研会議室、20日まで。道水産課藤原主事、道各水試担当官出席。
5. 22 海洋生物環境研究所長谷川由雄氏来所。
5. 26 物品検査のため水産庁漁政部漁政課喜多係長外1名来所。27日まで。
5. 28 鶴居村立幌呂中学校米沢教頭先生外中学生45名来所。
5. 29 日本国際貿易促進地方議員連盟道ブロック協議会道議会議員松浦義信氏外40名来所。
6. 2 探海丸第3次航海（第1次サケ・マス幼魚分布調査）出港、入江技官乗船、19日まで。
6. 8 海洋水産資源開発センター三村皓哉監事来所。
6. 8 漁業損害賠償請求処理委員会松本事務局長外1名来所。
6. 9 遠洋水研北洋資源部岡崎技官来所。
6. 10 北光丸第2次航海（第1次サケ・マス調査）出港、遠洋水研担当官乗船、7月4日まで。
6. 10 遠洋水研佐野北洋資源部長来所。
6. 18 今村水産庁長官、湯佐道水産部長、所司釧路支庁長外4名来所。
6. 19 中川一郎釧路事務所山田辰雄所長外1名来所。
7. 2 探海丸第4次航海（オホーツク海カニ資源調査）出港、土門主任研究官乗船、15日まで。
7. 3 留萌市産業港湾部長三蘆剛紀氏来所。

7. 9 北海道開発局営繕監督室南幸子技官外1名来所。
7. 12 北光丸第3次航海(第2次サケ・マス調査)
出港、遠洋水研担当官乗船、8月5日まで。
7. 13 帯広統計情報事務所佐藤水産統計課長補佐外
2名来所。
7. 14 養殖研究所栄養代謝部村井栄養研究室長来所。
7. 14 道開発局土木試験所萩野静也室長来所。
7. 15 アルゼンチンパタゴニア中央研究所ヘクトー
ル・サイソ(貝類研究者)、アリシア・サイ
ソ(藻類研究者)来所。
7. 16 養殖研究所水元大村支所長来所。
7. 17 技術会議事務局丸山整備課長外2名来所。
7. 20 探海丸代船建造第1回打合せ会出席のため探
海丸加賀船長東京都へ出張、21日まで。
7. 21 第4回北海道区ブロック会議開催、釧路東
急イン、各水試場長等及び北水研所長、企連
室長、3部長、庶務係長出席。
7. 22 北海道警察学校釧路方面分校生徒14名来所。
7. 22 道立中央水試小杉場長外5水試場長来所。
7. 24 長崎大学夏莉講師外学生40名来所。
7. 28 遠洋水研佐野北洋資源部長来所。

(阿部記)

◇人 事 異 動◇

昭和56年3月31日付

(水産庁研究部研究課) 農林水産技官 中野 広
命 北水研増殖部勤務 (兼任)

昭和56年4月1日付

(北水研庶務課) 農林産事務官 谷口 進
命 水産庁研究部漁場保全課勤務
(北水研庶務課) 農林水産事務官 小林 満俊
命 東海区水研総務部会計課勤務
(北水研北光丸一航士) 農林水産技官 菊池 賛洋
命 水産庁開洋九次席一航士
(北水研北光丸一機士) 農林水産技官 佐藤 長臣
命 水産庁開洋九二機士
(北水研北光丸甲板員) 農林水産技官 岡本 政敏
命 水産庁東光丸甲板員
(水産庁開洋九次席二航士) 農林水産技官 河内 淳二
命 北水研北光丸一航士
(水産庁開洋九臨時二機士) 農林水産技官 齋藤 真澄
命 北水研北光丸一機士

(水産庁船舶予備員) 農林水産技官 熊谷 幸夫
命 北水研北光丸甲板員
命 農林水産事務官 北水研庶務課勤務 香西 秀道
命 農林水産事務官 北水研庶務課勤務 池田 透
昭和56年5月1日付

(北水研資源第2研究室長) 農林水産技官 北野 裕
命 日水研資源部長
(北水研海洋第2研究室長) 農林水産技官 竹内 勇
命 東北水研資源第3研究室長

昭和56年6月1日付

(北水研資源第3研究室長) 農林水産技官 大迫 正尚
命 北水研資源第2研究室長

昭和56年7月16日付

(北水研増殖部) 農林水産技官 横山 雅仁
命 水産庁研究部研究課勤務
(遠洋研浮魚資源部主任研) 農林水産技官 新宮 千臣
命 北水研資源第3研究室長

編集後記

人事異動に記されているように、本年度の職員の異動は多数にのぼり、これは船舶職員は別として、今まで比較的動きの少なかった当水研としては異例なことであった。転出された諸兄は新任地に早くなじみ、新しい気分で活躍してほしいし、赴任されてきた諸兄は、これまた新風を吹きこんで、職場に活力を与えることを期待するものである。また庶務部門に新人も入ってまた。大きく成長することを祈ってやまない。

当水研が釧路に移転した時から図書資料の業務で活躍されてきた長沢聖子さんが、9月初め、めでたく結婚のため札幌に転出、退職されることとなった。臨職の身分ながら4年間にわたって一人で、入ってくる内外の資料整理、情報コピーサービス、研究報告、ニュースの印刷発送等に努力されて、良く業務に精通していた丈に惜しまれるが、心から祝福して送り出したい。長沢さんの今後の御幸福を祈るものである。

代って、目黒あい子さんが図書室に入ってきた。目下業務の受けつぎにいいそがしい毎日である。一日も早く仕事になれて活躍してほしいもの。

図書委員の横山雅仁さん(増殖部)が科学技術庁にゆかれたため、代って中野広さんが委員となったことを紹介する。

(飯塚 記)